

貴司山治と小林多喜二



貴司山治の遺品の中にあつた写真原板から新たに発見された写真。小林多喜二の遺体の枕頭に母セキ（和服姿）、その左隣りに多喜二の弟三吾がいる

2016年

6月1日（水）～7月31日（日）

月曜休館（7月18日は開館、翌19日休館）

会場 徳島県立文学書道館 3階文学常設展示室

昨年2月、鳴門市出身の作家・貴司山治（1899―1973年）の遺品の中から、特高警察の拷問で虐殺された小林多喜二（1903―33年）の遺体を囲む人々を撮影した写真の原板が見つかりました。撮影者不明とされてきた有名な写真の撮影者が貴司であったことが判明したほか、多喜二の母・セキらが多喜二の枕元にいる写真も新たに発見され、新聞各紙で大きく報道されました。

本展では新発見された写真を紹介し、多喜二虐殺前後に題材を取った貴司の小説「子」や、『小林多喜二全集』刊行を依頼された時のことを貴司がつつつた小説「一九三三年」の直筆原稿などを展示。貴司と多喜二の関わりを紹介します。

貴司山治と小林多喜二

プロレタリア文学の中心にいた二人

大正時代後半から昭和初期にかけての日本は、未曾有の世界恐慌を背景に、貧富の格差をなくそうと社会主義に希望を見いだす人々の活動が活発だった。しかし1928（昭和3）年頃から左翼労組や共産党の活動への弾圧が本格化する。労働者の組織が壊滅状態になっていく中、労働者のための読み物として貴司山治は多くのプロレタリア大衆小説を書き、好評を博した。

同じ頃、小林多喜二も「蟹工船」など代表作を次々と発表し、プロレタリア文学の旗手として注目される。共産党に入党し、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）や日本プロレタリア文化連盟（コップ）の中心的存在として最前線で活動した。

多喜二の死に際し、貴司は警察の監視の目の光る中、多喜二のデスマスクをとる段取りをつけたり、遺体の写真を撮ったり、仲間として重要な役割を担った。

また多喜二が虐殺される3週間ほど前、非合法活動をしていた多喜二から連絡を受け、貴司は彼に会いに行く。その半年前に、多喜二から「右翼偏向だ」といって作家同盟の役員会から追い出されたばかりだった貴司の心中は複雑であった。

そうした二人の微妙な関わりは、貴司の随筆「小林多喜二との最終的対談」や、多喜二虐殺前後の日々に題材を取った貴司の小説「子」によく表れている。

彼は明るい光りの下で顔を見合せると、唇の辺あたりに子供っぽいほにかみをいっばいみなぎらせ、いきなり餉くわ台たいに頬杖ほこぞうをついて、

「何故あんな手紙をやつたか……。いろいろあひたいことがあつたんだよ。でもね、それはもつとあとにしようと思つてゐたんだ。」

「僕も君にはあひたいのと、あひたくないのと両方だつたね。よびにきてもあふまいと決心してゐたんだ。」

三尾のいひ草が平然とおちついてゐるだけに成田は力をおとした様に、顔色を変へてしまつた。

「それは……何故だい……？」
と成田はひどく声を乱した。

「しかし、かうして出て来たんだから、まあいゝぢやないか。君の書いたものはみんな読んだよ。そして敬服したよ。今はこつちの仕事で、目安めやすに出来るのは君一人だと思つたよ。尤も前からさうだつたけれどね。」

「そうかい、みんなわかるかい？」

「あゝ、わかるさ。」

成田が匿名とくめいで書いている指導的な論文にはこの一年の間に成田が非常にえらくなつたことが判つて、三尾には一種の憎しみ——到底追ひつけないといふ絶望——をさへ感じてゐた。しかし、今そんな話を持ち出したのは、三尾の本当の気持ちでも何でもなかった。一向なじまないお互いの場繕いのお世辞のつもりだつたのが、成田がすぐに又その話題で、こつちのふところへ飛込んで来ようとするのがわかると、三尾は口をつぐんでしまつた。

『小林多喜二全集』編纂に関わった貴司

1933（昭和8）年は小林多喜二の虐殺のあった年であり、貴司山治が最初の検挙拘束を受けた翌年でもある。この時期、貴司は共産党に活動資金を献金するなど、相当な覚悟で左翼活動に協力していた。

多喜二の死の直後、プロレタリア作家同盟版の『小林多喜二全集』第二巻だけが出版されるが、その後が続かなかった。そこで33年の夏、貴司は共産党幹部の宮本顕治から小林多喜二全集刊行の相談を受け、世話を引き受ける。刊行会を設立するなど作業を進めていたが、弾圧下での刊行は困難であった。やがて、貴司自身も検挙される。

転向を表明し、自由の身となった貴司は、相談する者もない中、単独で全集の編纂を進め、35年、ついにナウカ社からの『小林多喜二全集』全5巻刊行にこぎ着けた。

そのいきさつは、戦後、貴司が当時を回想して書いた小説「一九三三年」や、『小林多喜二全集』第三巻（新日本文学会版）の月報に載った『小林多喜二全集』の歴史」から推し量ることが出来る。

一九三三年の初夏、私は共産党中央部の幹部として活動していた宮本顕治から「小林多喜二全集の発行は党中央委員会の仕事として行うことにきめた。自分が中央委員会から委任を受けて処置することになったので、君が合法面でのその仕事の責任者となつてやつてもらいたい。」との相談をうけた。（中略）

私は、六十何人のプロレタリア文化人やその他の自由主義的、進歩的文化人をおつめた独立の、大衆的な小林多喜二全集刊行会を設立して、一九三三年の夏から秋へかけて、前金と基金の募集を行い、「党生活者」の伏字なし、原文どおりの組版を終えた。しかし、プロレタリア文化団体は、その時もはや四分五裂の状態で、基金、前金合せて三百円余り集つたが、刊行は不可能であつた。

（中略）

一九三五年に、私は幸い又自由をとりもどしたので、一存でやはりこの「党委託」の仕事をつづけることにきめ、ナウカ社を発行所として、小林多喜二全集を小説だけ三冊、論文はどうしても出せそうもないのでのこし、代りに書簡集、日記各一冊を編さんして、合計五冊刊行した。この発行部数合計約二万である。

この最後の努力は三四・三五・三六の三年ごしの仕事となつた。このころは、もう小林多喜二の本を出す仕事などには相談にあずかつてくれる人もなく、多くの旧ナルプの文学者たちでも、こわがるか、いやがるか、でなければ無関心であつた。おかげで私はこの仕事をひとり占めすることができて、ずいぶん楽しかつた。もつとも、この仕事「党遺託」の仕事であるのを知っていた中野重治、宮木喜久雄の二人は、最後まで私に協力してくれた。

（『小林多喜二全集』月報〈3〉 1949年 新日本文学会発行）

全集編纂に託した貴司の思い

戦後の1947（昭和22）年、貴司は新たな『小林多喜二全集』編纂委員会への参加を同委員会の専従だった手塚英孝から要請され、求めに応じる。だが、やがて編纂方針の対立が生じた。文献性を維持して原文を尊重していこうという手塚の主張に対し、貴司は「わけのわからぬところや、ひどい誤謬のところ」は適宜修正加筆してしまおうという意見。考え方の違いから貴司は編纂委事務局長を罷免され、委員会と疎遠になる。かくして戦後最初の『小林多喜二全集』編纂事業は貴司を欠いたまま進められ、完結した。

しかしながら、戦前、戦後を通じ、貴司の『小林多喜二全集』編纂事業に果たした役割は大きい。小林多喜二の本を出すという、多くの者が特高警察の弾圧を怖がった仕事を引き受け尽力した貴司の胸中には、同時代を生き、同じように生死の境をかくぐつた同志への共感と並々ならぬ思いが渦巻いていただろう。だからこそ、働く貧しい人たちのために、多喜二の著作を誰にでも親しめる知的財産として世に在らしめたいと貴司は願ったのだらうと思われる。

「貴司山治と小林多喜二展」に寄せて

—新発見の写真から

伊藤 純（貴司山治長男）

貴司山治は大衆小説家であると同時に、相当な写真マニアだった。私の幼少期の記憶でも、家には専用の暗室があり、原板の現像から紙焼きまですべて自家でできたし、ライカはじめ高価なカメラを所持していた時期もあったようだ。ただ、高価なカメラは金に窮すると結局質屋に送り込まれてしまい、残念ながら現存していない。

以前から、拙宅には貴司の写した写真の原板が段ボール箱一杯ほどの量で保存されていることは分かっていた。ただ、何分原板は直視しても内容が読めない白黒逆のネガ像であり、しかも大判（大名刺判）のガラス乾板から三五ミリフィルムまで多岐にわたるので、内容の確認を怠り放置していた。

昨年（2015年）ようやくポジ像に変換できるスキャナーを入手して読み込んでみると、続々と興味深い画像が出現した。

中でも、従来撮影者不明で流布していた小林多喜二虐殺直後の写真の原板や、その夜に同時に撮られたと思われる別カット、同じ構図で母セキさんと第三吾氏を中心とした親族中心のカットも発見された。

二枚とも手ぶれが激しく、感度の低い当時の乾板での撮影の難しさとともに、撮影者の心の揺らぎが感じられる。警察が当然のように逮捕者を拷問虐殺し、しかもそのことを告発どころか公言もできないという暗い時代の極限の状況が感じられる画像となっている。